

2025年度

逢瀬いなか体験交流協議会

活動報告書



概要

逢瀬いなか体験交流協議会とは

逢瀬いなか体験交流協議会は、福島県郡山市逢瀬町を拠点に、都市と農村をつなぐ体験型交流事業を推進する団体である。

地域の農業や食文化、自然環境、暮らしの営みを資源として捉え、訪れる人が単なる観光客としてではなく、地域と関わり続ける存在となる「関係人口」の創出を目的としている。

本協議会の特徴は、「また来たい」を生み出す関係性の設計にあり、農業体験やいなか料理体験、地域住民との交流を通じて、参加者の中に再訪意欲や主体的な関与を育てている点にある。

大学との連携によるスタディツアーや、首都圏でのイベント・情報発信などを組み合わせることで、都市での出会いから現地での体験、さらには継続的な関わりへとつながる循環を構築している。

また、参加者が企画や運営に関わる機会を設けることで、「訪れる人」から「関わる人」へと役割が変化する仕組みを実現している。こうした取り組みを通じて、地域に新たな人の流れを生み出すとともに、持続可能な地域づくりに寄与する実践モデルの確立を目指している。



逢瀬いなか体験交流協議会

Ouse-Inaka Experience Exchange

報告書の内容

本報告書は、福島県郡山市逢瀬町を拠点とする「逢瀬いなか体験交流協議会」における2025年度の活動実績を整理し、以下の2点を中心に検証するものである。

1. 都市部（首都圏）との接続による関係人口の創出
2. 「また来たい」を生み出す体験設計と継続的な関係構築

本事業は、観光消費にとどまらず、地域との関係性を育てる「貢献型旅行」を軸とし、参加者が地域と継続的に関わる状態を生み出すことを目的としている。単なる来訪者数ではなく、「再訪」や「関与の深化」といった質的な変化に着目し、活動の成果を整理する。



2025年度の記録

数字が示すのは、
「一度の接触で終わらない関係」

来訪者数(延べ)

80人



STAY

出店来客数

450人



EVENT

総接点数

530人



TOTAL CONTACT

- ・学生参加者の割合が高く、大学連携を中心に構成
- ・都市イベントから体験参加へと接続する導線を形成
- ・リピーターおよび継続関係者が一定数発生

都市部での接点づくりから、実際の来訪・体験へとつながる流れが形成されており、「一度の接触で終わらない関係」が生まれている点の特徴である。



逢瀬いなか体験交流協議会はこれからも「きっかけ」を作り続けます。

関係人口という成果

総務省の定義に基づき、関係人口を「継続的に地域と関わる人」と整理した場合、本年度の活動においては以下の層が形成された。

関係構築のプロセス



これらは単独の施策ではなく、相互に接続された「循環」として設計されている。

特徴：消費から関係人口へ



体験を通じて地域の人と直接関わる



一過性ではなく継続的な関係を前提とする



学生が企画運営に関わることで主体性が生まれる

本事業の最大の特徴は、参加者を単なる観光客として扱わず、「関係を持つ人」へと変化させる構造にある。

重点事業：「逢瀬の日2026」

本年度の活動の中核となったのが、
首都圏と逢瀬町の20年にわたる関係性を記念
した

「逢瀬の日2026」である。

本イベントは、単なる記念事業ではなく、
これまでの20年間の蓄積を可視化し、
次の関係人口創出モデルへと接続する“転換
点”として位置づけられた。

本イベントの最大の成果は、
過去の実績を「共有する場」にとどめず、
未来の関係性を「生み出す場」として機能し
た点にある。

様々な出逢いを
思い出す



当時と同じ
作業

あの日の学生が
親世代に



- 過去の参加者が再び関わるきっかけとなった
 - 新規参加者が現地訪問への意欲を持った
 - 20年の関係性が“継続する仕組み”として再定義された
- 本イベントは“関係人口の再生産拠点”として評価できる。

来たことのある
学生による発表



おいしい逢瀬町産
お野菜



人と地域の関係を育てる 循環モデルの確立

2025年度の活動を通じて明らかになったのは、
本事業が単なる観光施策ではなく、
「人と地域の関係を育てる仕組み」であるという点である。

都市での出会いから、現地での体験、そして再訪へとつながる流れは、
関係人口創出のモデルとして機能し始めている。

特に「逢瀬の日2026」は、
20年間の関係性を“過去”として整理するだけでなく、
“未来へ接続する装置”として機能した象徴的な取り組みであった。
今後は、この循環をさらに強化し、

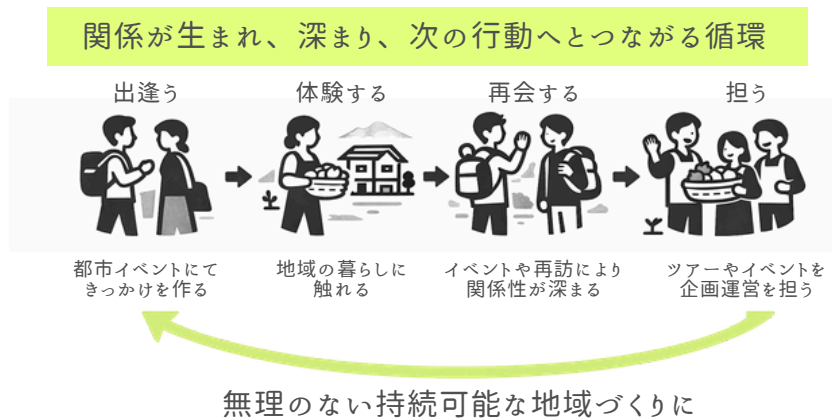
- ・訪問者が関係人口へ
- ・関係人口が担い手へ

と変化していくプロセスを設計することで、
持続可能な地域づくりへと発展させていく。



「また来たい」を起点とした関係人口創出モデル

逢瀬いなか体験交流協議会の取り組みは、
「また来たい」を起点に、
人と地域の関係を生み出し、
その関係を深め、
次の行動へとつなげていく実践である。
それは単なる観光ではなく、
関係人口を創出し続ける仕組みであり、
今後の地域づくりにおける
有効なモデルとなり得るものである。



これまで地方では、「人が来ないから」と自分たちで企画し、
集客し、ときには価格を下げてでも人を呼び込む努力を続けてきました。
しかし、そのやり方はどうしても担い手が疲弊しやすく、関わる仲間も広がりにくいという課題がありました。
そこで我々は、発想を少し転換し、「呼ぶ側」ではなく、「来る側」を起点とした仕組みづくりに取り組みました。
実際に訪れて「楽しかった」「また来たい」と感じてくれた参加者自身が、
次は企画する側へと回っていく。収支の設計も含めて担ってもらうことで、無理のない形で関係が続いていきます。
この循環が生まれることで、地域の負担は大きく軽減されます。
なぜなら、お客さんが次のお客さんを自然に連れてきてくれるからです。
さらに、企画する人自身が参加者に最も近い感覚を持っているため、共感を生みやすく、友人知人に声をかけやすい。
そんな小さな循環の積み重ねが、これからの関係人口づくりの一つの形になると感じています。

次のステップ

本事業が掲げる「関係人口創出モデル」の再現性と持続性を高める上での重要な論点である。今後は、偶発性に依存した関係づくりから一歩進み、仕組みとして人の流れと関係性を生み出し続ける設計へと発展させていくことが求められる。

もっと、関わりが生まれる場所へ。



① 単発を継続関与へつなげる仕組の強化

一度の参加にとどまらず、再訪や継続的な関与へと段階的につなげていく仕組みを体系的に設計・強化していく必要がある



② 都市と地域をつなぐ導線のさらなる強化

都市と地域をつなぐ参加導線を体系的に整理し、関心から来訪へとつながる機会の創出を一層強化していく必要がある



③ 関係人口の変化を追う可視化の不足

関係人口の変化を段階的に把握できる指標を整備し、継続的なデータ蓄積と分析体制を構築していく必要がある



これからは、もっと遠くの仲間たちを増やしたいと思っています！
都会にしながら逢瀬町に関われる仕組みを提供します！



今年はたくさんみんなに逢いに行きます！
まだまだご協力をお願いします！！



逢瀬いなか体験交流協議会
Ouse-Inaka Experience Exchange